

受賞の紹介

九沖農研育成飼料用サトウキビを導入した経営が受賞

畑作研究領域 境垣内岳雄
作物開発利用研究領域 早野美智子

南西諸島と言えばサトウキビや熱帯果樹を連想される方が多いかもしれませんが、肉用子牛の生産が盛んな地域でもあります。しかし、島であり畑の面積が少なく、台風・干ばつも発生するため、飼料作物の増産は容易ではありません。

このような中、鹿児島県与論島の肉用子牛生産者の叶太輔さんが、ローズグラスの一部代替として、新たにトランスバーラや飼料用サトウキビを導入し、飼料作物の増産と飼養頭数の増頭を実現されたことが評価され、2017年2月に「第56回全国青年農業者会議」の畜産部門で農林水産省経営局長賞を受賞されました。このうち、飼料用サトウキビ「しまのうしえ」は当センターが育成した品種であり、高い乾物収量と台風・干ばつにも強いことを特長とします。

お父様の叶敏典さんが導入された後、鹿児島県大島支庁沖永良部事務所、与論町役場、当センターと

議論を重ね、お二人で栽培や給与の方法を改良されてきました。現在は鹿児島県奄美地域の栽培面積が大きいです。2017年には沖縄県で「しまのうしえ」が奨励品種として登録されており、今後の南西諸島における飼料用サトウキビの利用拡大が期待されます。



写真 叶敏典さん(左)、太輔さん(右)と飼料用サトウキビ

シンポジウム開催報告

農研機構シンポジウム「熊本地震で農地や作物に何が起こったか？」報告

企画部産学連携室長 樽本 祐助

平成29年6月20日に、熊本市のユウベルホテルにおいて、農研機構シンポジウム「熊本地震で農地や作物に何が起こったか？－熊本農業のさらなる復興に向けて－」を開催しました。このシンポジウムでは、地震発生を受けて急遽開始した緊急対応研究「被災地域の営農再開に向けた熊本地震による農地・作物生育への影響に関する調査研究」から得られた成果の中から、(1)農地の地表および地下構造への影響、(2)液状化が土壌の化学性に及ぼした影響、(3)水稲や大豆、飼料作物、果樹、野菜への影響について報告を行いました。

シンポジウムには行政・普及機関、研究機関、関係団体など195名が参加し、今後の熊本農業の復興に向けたディスカッションが行われました。その中には、「震災被害を受けた圃場の再利用を進めるた

めには、圃場の状況を的確に把握し、対応策を具体化する必要がある。そのため本研究で得られたドローン活用のノウハウを現場で活用できるようにしたい」という要望がありました。また、「不陸という不均一な圃場条件のもとで、安定的に作物を栽培できる技術開発が必要である」といった期待がよせられました。

シンポジウムの開催にあたっては熊本県に共催いただくとともに、農林水産省の九州農政局や農林水産技術会議事務局から後援をいただきました。また研究を進めるにあたっては、熊本県農業研究センター、熊本県農林水産部、同地域振興局の関係者、さらに現地の農家の皆様からご協力をいただきました。ご支援に感謝いたします。